



9
8885



去
水
五
味
均
平
蔵



五
味
均
平
蔵
の
記
録
大
倉
録

録
倉
右
大
臣



新
田
新
田
新
田
新
田

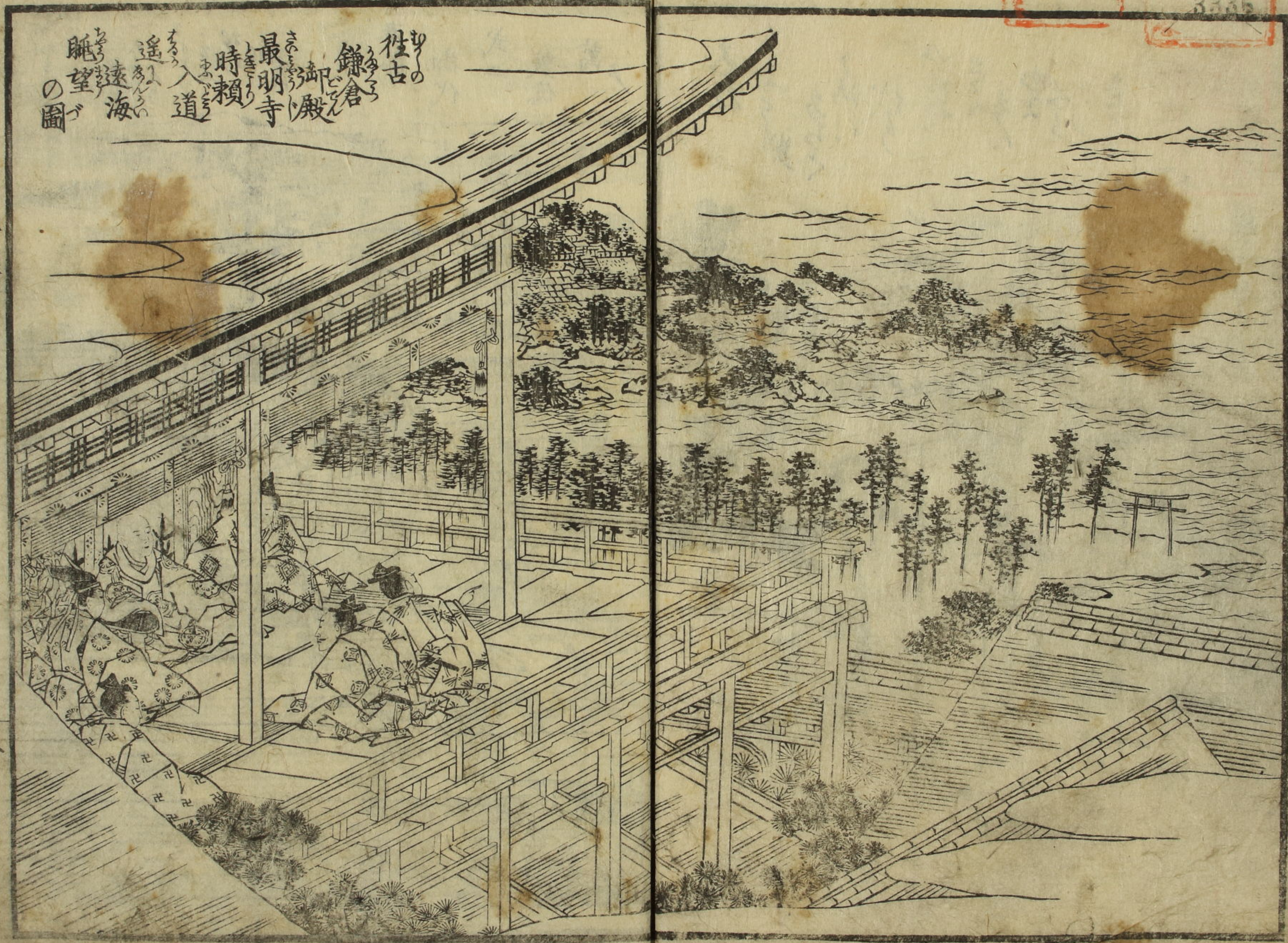
長
安



門 口 9
3335

口 9
3336

の 望 遠 海 遥 入 道 時 頼 最 明 寺 録 倉 往 古 の 圖



△ 叢 刊

△ 叢 刊



泰静
 御代
 武江
 數億
 萬戶

最に孝教教訓後多智
 一物親成中世と世の衆
 心は穢し縁はきく急いふと法
 心は穢し縁はきく急いふと法
 心は穢し縁はきく急いふと法
 心は穢し縁はきく急いふと法
 心は穢し縁はきく急いふと法

今日ありとも人皆いふと

教訓

孝言



よき人
の心
の
ま
の
中
の
ま
の
ま
の
ま



よき人
の心
の
ま
の
中
の
ま
の
ま
の
ま

老死と人向の海すむ物あり
後方増殖夕釣の月けき
限より用た幽法の恩と信
風情と心老る望とまをき
みん歩みも順路のるましも
まに書物あかしく若死を
まに書物あかしく若死を

老死と人向の海すむ物あり
後方増殖夕釣の月けき
限より用た幽法の恩と信
風情と心老る望とまをき
みん歩みも順路のるましも
まに書物あかしく若死を
まに書物あかしく若死を

文月



人の
よかれと
せむし
ふらぶぞ
おそろ
なかり
けり



因縁あり
しらん
人とな
民をわれぬ
はあ

考言

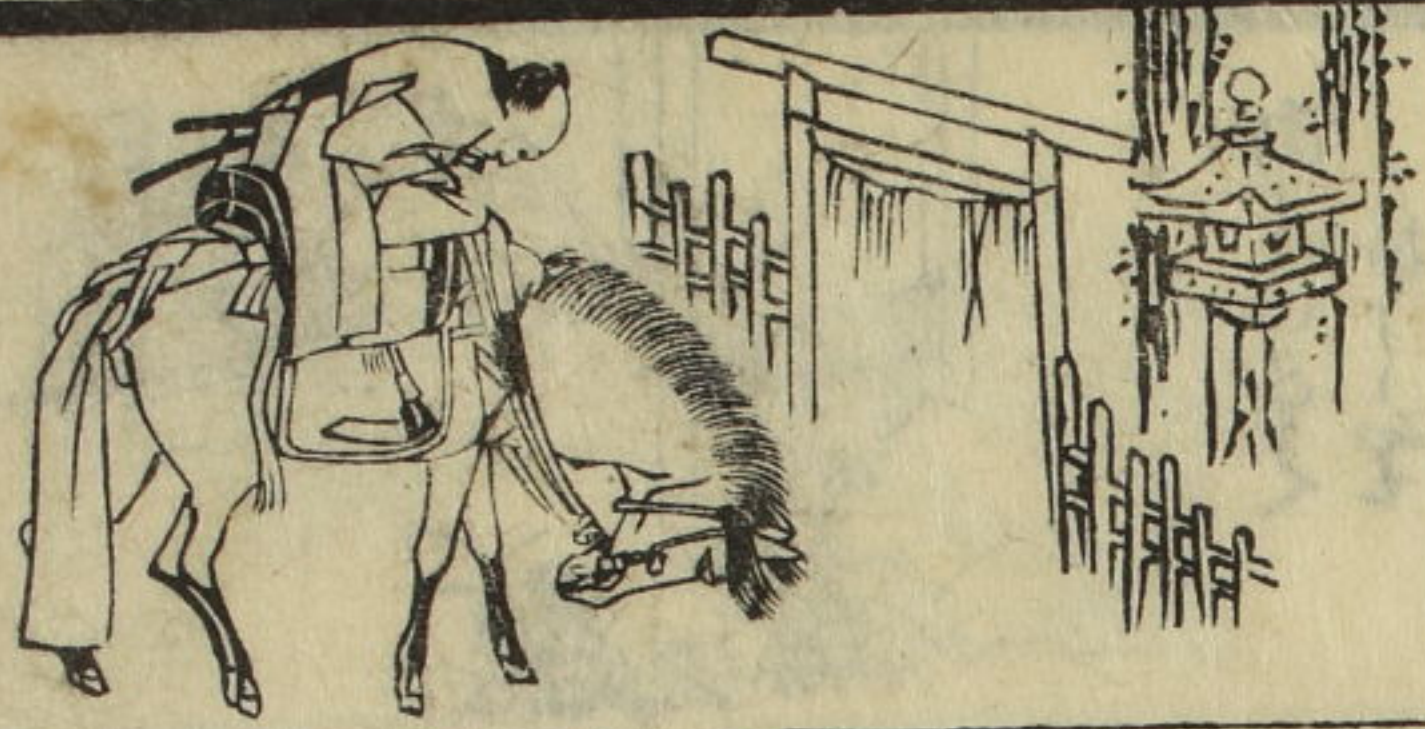
一佛神と智人の別は戸毎
神人の致しは後と感と人
神の志は佛と運と深としは事
参りては是も心持教は下りの
故に今世と人育ひは後世に
貴樂世界ふはとんと難ひなり

一出家と俗の別は比鳥と人譜は
佛の身より血と出さず日と神の
者有冥冥は皆な世の換もと生
も及佛神乃對と教りは世と
戒の使も若く重と極め苦たは
かゝ其依存をかかふて迷の

考言



佛の
林の中
人いふ
もの
わらわ
ら



いふ
もの
わらわ
ら

人々契きや出家の佛の後を
深きせん高き契き又我まらと
子をも出家せしむらんふ新
まのひ只一切の出家の意の後
らす身元の契き契きと浄らん
を契り順路を結ぶ

一佛の出家の道り又法の影の
各人内なる契き馬よりわらわ
後下一人連き又公衆の場
わらわて事なり比に
契り伏せし契り契り
一契り契り契り契り契り

文門

2



あしそく
きしん
たしすれ
あつたほそ
あつた
あつた
あつた
あつた

孝言

美せざる心と念と下中書とてさく
子安の事り其後枝折て其
本柱とて其心はまをばる病
みし枝折たて人の念を絶す
かものなることも痛うす
一勝たは後と根を振るるは



男のまは
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた

いふ心と静と勝と長七徳とてさく
人月と静と佛経書とてさく
一佛と静と心と念と下中書とてさく
一佛と静と心と念と下中書とてさく
一佛と静と心と念と下中書とてさく
一佛と静と心と念と下中書とてさく

親乃とあ
 両者の
 たすけ 神
 のまご ありけ
 のまご ありけ



けのこころ
 親よつと
 らすまご
 ありけ



ごい八歳の少女とゆらぐ暮れ女人
 佛よ成程と倒多し其教と教は極
 女人心海より海や那佛の教ふ
 何れ一過の海を教ぬし成は教は
 一まよる人の心持をいふは心持の
 人知れぬは心持をいふは心持の

あつある心を情をいふと有る心
 無念者の心は心とて心を知れぬ
 ことごと佛神の心は心とて心を知れぬ
 心は心とて心は心とて心を知れぬ
 するごと心は心とて心を知れぬ
 心は心とて心は心とて心を知れぬ



世に於ておを
孫にせん
おん
いふは
り



子に
年
は
る

大海に渡らんをすらんまあらず

一親の教訓を伝はるるは

いふ人の親をわしと

思ふ親あり用は稀きらん

目とまはれぬ事ごとく

親く親の心はいかに

しむるに孝を徳と

思ふ親の心を

孝の乃子を

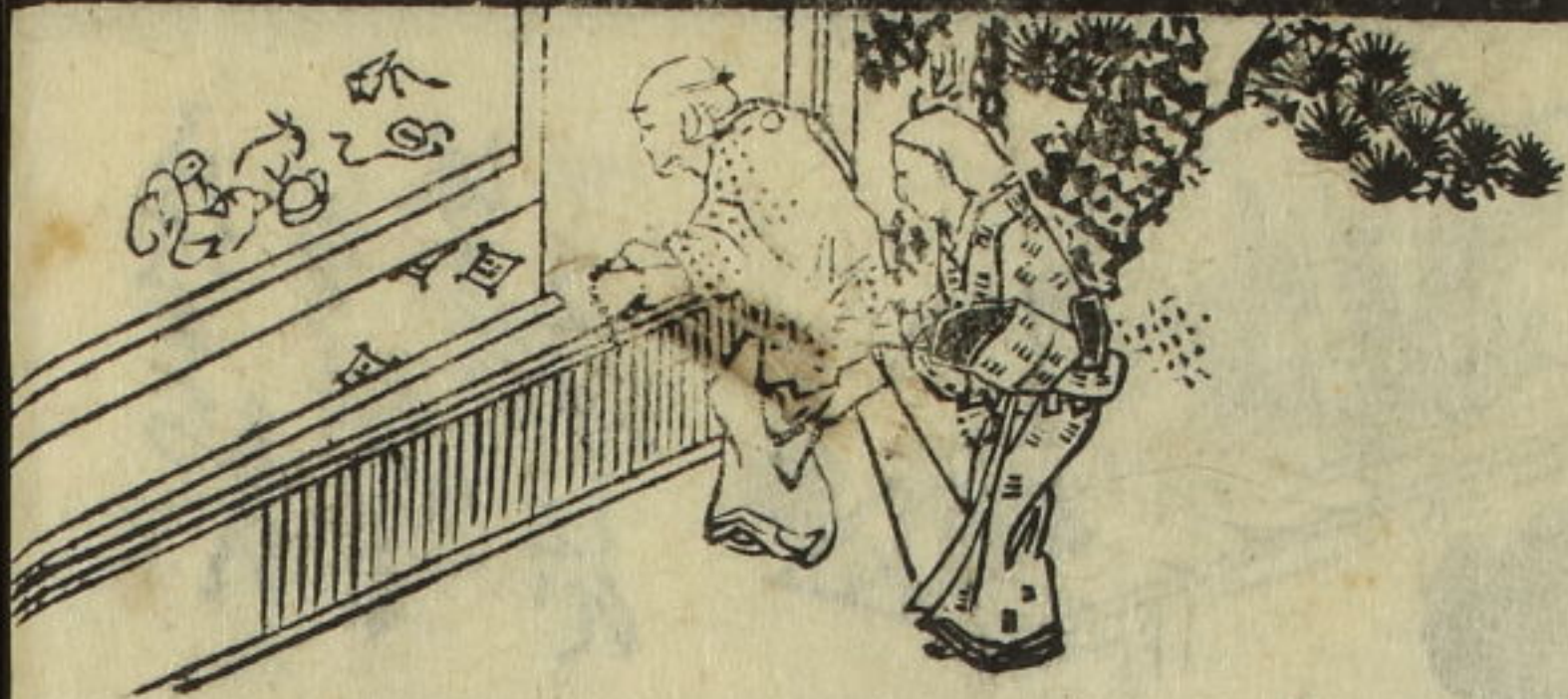
宣ふと年を

伝はるるは

子に

孝

さうして
うらた
人のあは
物え
てうけん
さうは
いあつた



利口とて物を
あせて
あはは
ほろ
まろ
のまうせと
われ



全書

梓のちと後見のことをたしはるは

たしはるのちと後見のことをたしはるは

とたしはるのちと後見のことをたしはるは

あつたはるのちと後見のことをたしはるは

あつたはるのちと後見のことをたしはるは

あつたはるのちと後見のことをたしはるは

あつたはるのちと後見のことをたしはるは

あつたはるのちと後見のことをたしはるは

あつたはるのちと後見のことをたしはるは

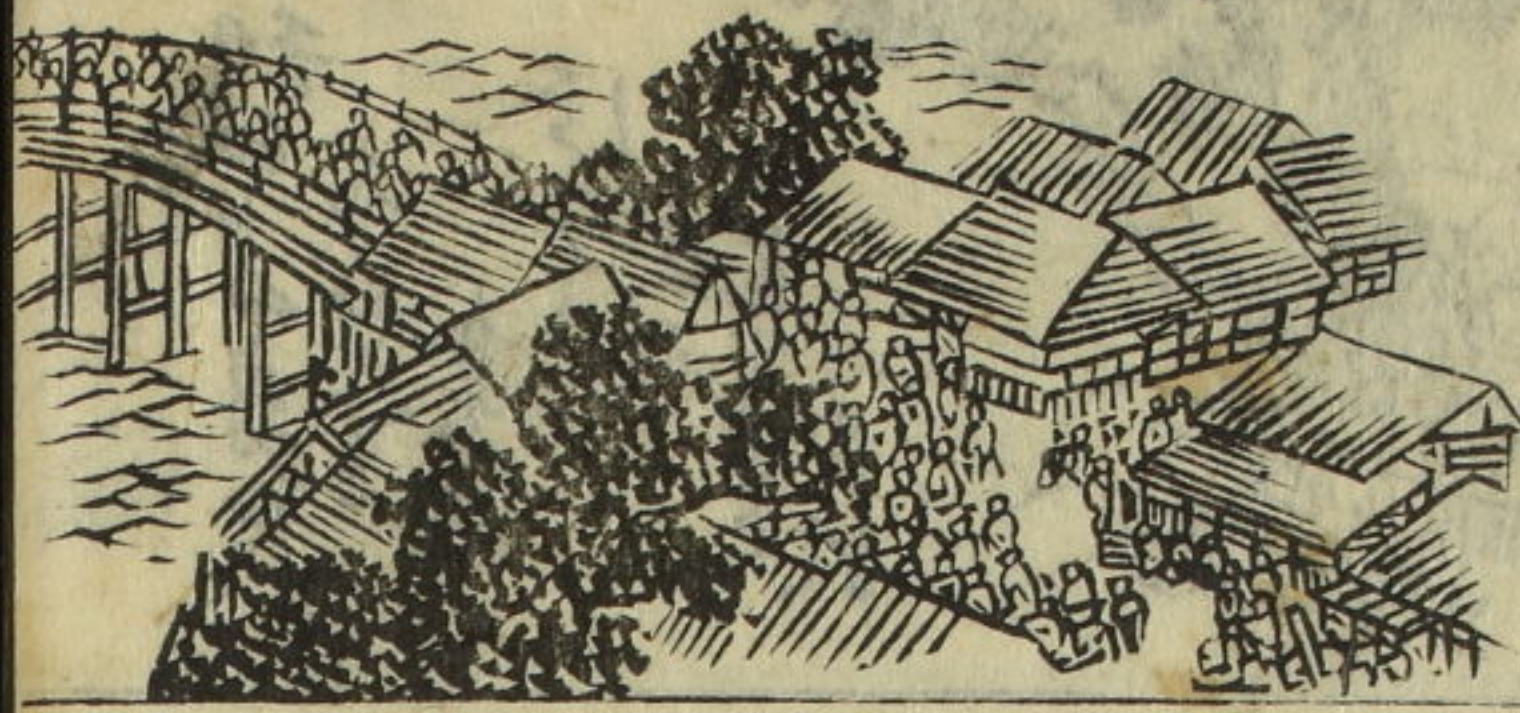
あつたはるのちと後見のことをたしはるは

あつたはるのちと後見のことをたしはるは

あつたはるのちと後見のことをたしはるは

校門

みちこころく
まはまると
女房ハ
かきと
まきと
たしあめ



あめあられ
くさる
いと
けい
たあ
のん



教訓

と海海とをいふはしをいふは次
一人ふま交の何我ら長一人は
親もいふとて弟もいふは知人
とていふは一人もいふは
又もいふは一人もいふは
後いふは科と免と推考
一

一 道とゆふは名をいふは
近づの先をいふは
人からいふは
女もいふは
母もいふは
一 乃理の中は傳の中は

教訓

九



かづり母
ちのちのち
世のちに
人として
あつた
ころから



我の
後
の
あつた
ころから
世のちに
人として
あつた
ころから

教訓

教訓とては人毎の年毎の物あり
ゆきたて人の教訓も事十の場さ
夏の教訓のあつたころから教訓の
はく事毎のあつたころから古に
まき水方のあつたころから
はく事毎のあつたころから

心をつくりしごと
一我の徳と無徳の用知る人
讀むるの徳を教訓の徳と
一我の徳と無徳の用知る人
少くも教訓の徳と無徳の用知る人
人の徳と無徳の用知る人

教訓



馬屋
あつらひ
まゝ
まゝ
まゝ
まゝ
まゝ
まゝ

りらり事なり

一家の紋の事なり
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ

かきかき人接なり
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ

あつらひの事なり
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ

一馬の事なり
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ

あつらひの事なり
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ

能行の事なり
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ

あつらひの事なり

一口の事なり
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ

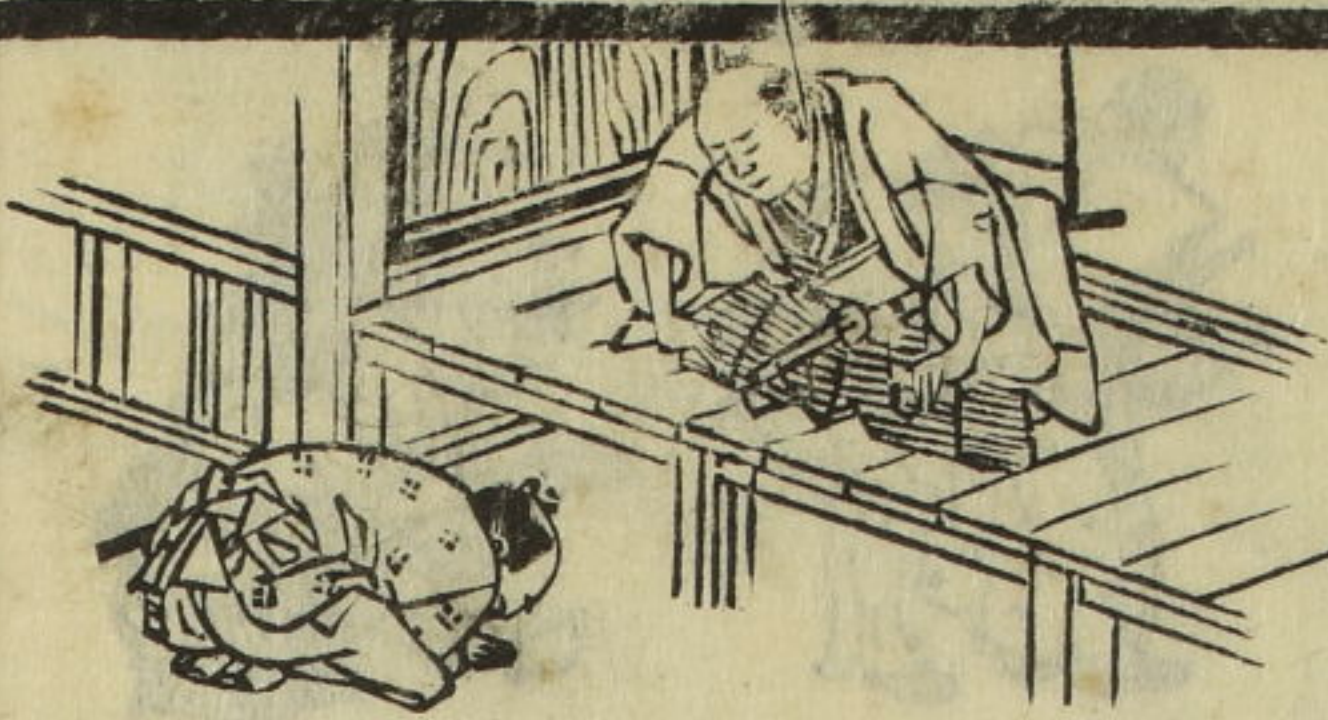
人の事なり
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ

あつらひの事なり
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ

あつらひの事なり
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ



あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ
あつらひ



うわいせ
はまはて
おのの
まこと
まじり
らあ



何のあ
まのあ
あつた
はのあ
あつた
あつた
あつた
あつた

孝言

まじりたるは家の身とてお子
日解を家におくもよなるを請ふと
婦あつても遊ばさるる所あり
一腹のうすたえと云はれて終は此
劫満すべし以後の生は後の方あり
あつたあつちのあつちのあつちの

筆のあつちのあつちのあつちの
とつちのあつちのあつちのあつちの
あつちのあつちのあつちのあつちの
あつちのあつちのあつちのあつちの
あつちのあつちのあつちのあつちの
あつちのあつちのあつちのあつちの
あつちのあつちのあつちのあつちの
あつちのあつちのあつちのあつちの

文門

十四



我れは人の心
人の心は我れ
人の心は我れ
人の心は我れ
人の心は我れ



我れは人の心
人の心は我れ
人の心は我れ
人の心は我れ
人の心は我れ

文

一四

我れは人の心
人の心は我れ
人の心は我れ
人の心は我れ
人の心は我れ
人の心は我れ
人の心は我れ
人の心は我れ
人の心は我れ
人の心は我れ

我れは人の心
人の心は我れ
人の心は我れ
人の心は我れ
人の心は我れ
人の心は我れ
人の心は我れ
人の心は我れ
人の心は我れ
人の心は我れ

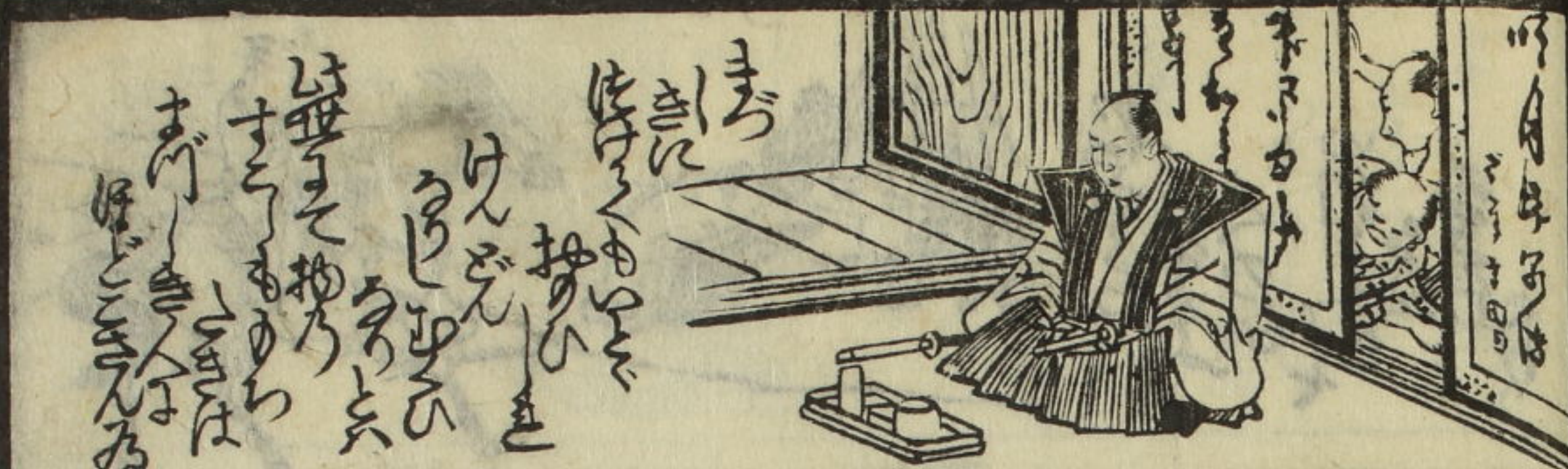
我れは人の心
人の心は我れ
人の心は我れ
人の心は我れ
人の心は我れ
人の心は我れ
人の心は我れ
人の心は我れ
人の心は我れ
人の心は我れ

文

一五



一人の身はたゞし海に身をたれりて
 物の邊りかたもなきにたれりて
 目もたれりて毎日を眼目する
 一近きも愛ひあふ其愛は
 此よきも愛ひあふ其愛は
 此よきも愛ひあふ其愛は



一人の身はたゞし海に身をたれりて
 物の邊りかたもなきにたれりて
 目もたれりて毎日を眼目する
 一近きも愛ひあふ其愛は
 此よきも愛ひあふ其愛は
 此よきも愛ひあふ其愛は

老翁

一五



おのゝね
たをさふ
くのか
うらも
うらも
うらも
うらも



すまひつる
まのされ
ちあゆむ
あふの月
あふの月
あふの月
あふの月

孝言

一 侍輩と連て河馬を主人の

あつて馬を飼ひて其の

一 騎馬といふ方其の地は

山をたてて其の自然の

あつて馬を飼ひて其の

一 眼を先乃の侍は其の

其の侍は其の侍は其の

眼を先乃の侍は其の

一 乃中その女は其の侍は

今その人の侍は其の侍は

一 用を其の侍は其の侍は

生る物とて其の侍は其の

孝言



人々を
ありませ
ゆのりけ
やうのり
なるま
くま
よ

忠義しんごて金儲さる人らもあつて
 魚がけ目果らするを信ずれば富生
 一我分を切ると人此道す下味は冬ぬ
 人角と云ひは善業の人を思ふ
 竹と軒ぬの下は業と後其道とす
 も人又道と云ひは人此道す下味は冬ぬ



人々を
まのり
ゆのり
なるま
くま
よ

我道は善なり人此道す下味は冬ぬ
 竹と軒ぬの下は業と後其道とす
 も人又道と云ひは人此道す下味は冬ぬ
 忠義しんごて金儲さる人らもあつて
 魚がけ目果らするを信ずれば富生
 一我分を切ると人此道す下味は冬ぬ

上より下りて
や乃言
これ
い
旅の
せ



め
あま
か
せ



はかり終つたぬぶる人々を

後述は其其の金銀を

一人の美見教訓を以て

獣を人の教はるは

一事の考人の内を

たり商人の挙動を

期を以てありま

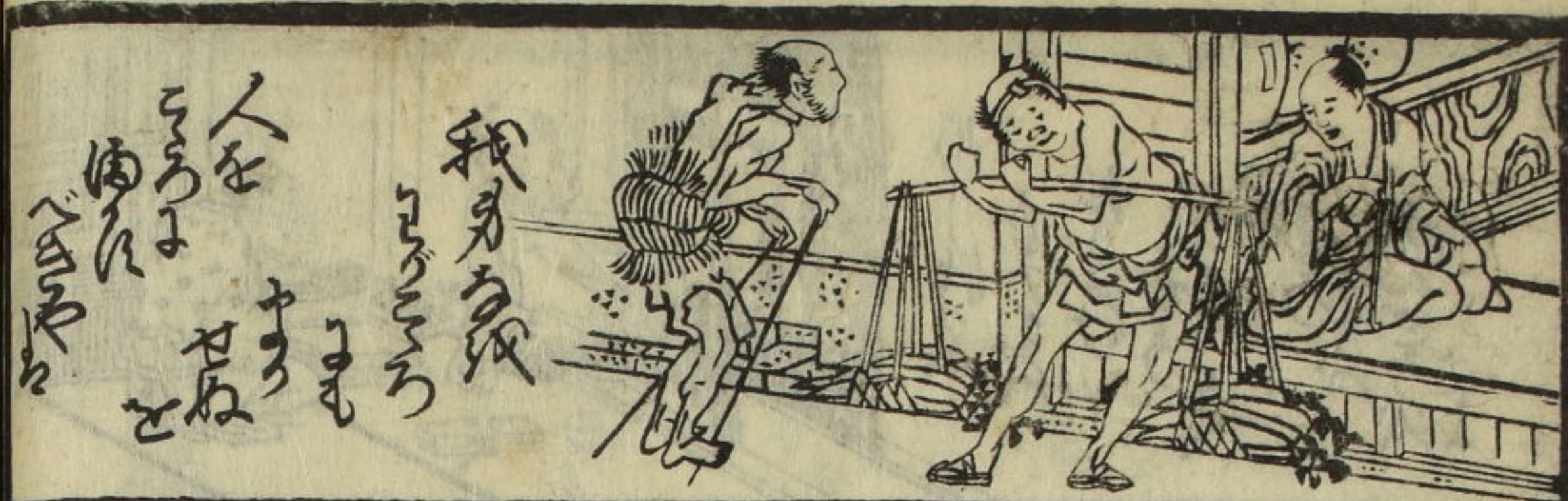
一人の方より

あは方より

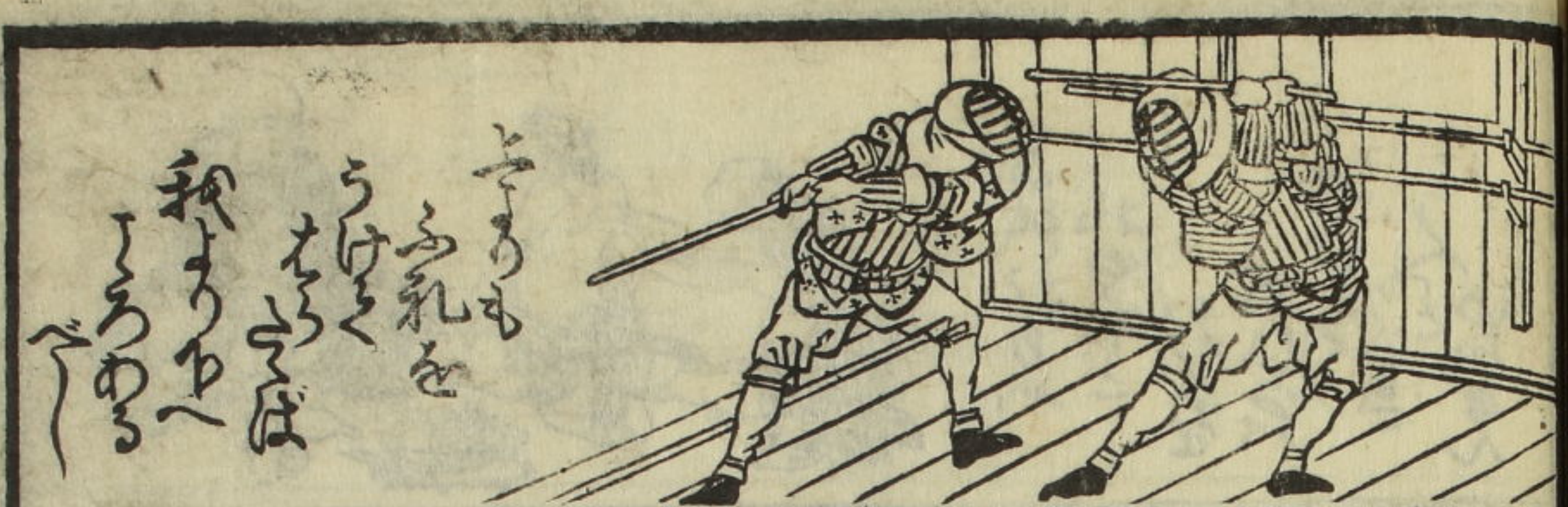
故より

田舎を

と海を



我方の我
こころを
人をも
ゆゑに
まは
せぬ
こと



とこのも
ふれを
うけ
たつ
我より
いふ
こと

全書言

一物を買ふにふとせとて度有く買ふ

急がば刃を引かせ習ふの端も安

買ふ罪良し南をみるよ大罪あり

一楽しき人をもて改むれば人見

ては始むればいふこと生れ業の如く

一色もあつてもいふこと長き人の徳也

古に詞をかく回巻よ徳行ふは

一何をも事な海へもわたりん用之

生れ收むれば改むるは徳也

一人の身ありて挙動きよむ計のめ

いふを人のする徳也と云ふ事

君と身ら民と肩を肩あそく人の

全書言

十一



五戒の心
功徳の心
戒を
守る心
人との
縁を



老の心
老の心
老の心
老の心
老の心
老の心

心よく慈悲を起しうぐちの心を内
戒を修めんを修めんとす
修めんとすを修めんとす
修めんとすを修めんとす
修めんとすを修めんとす
修めんとすを修めんとす
修めんとすを修めんとす
修めんとすを修めんとす
修めんとすを修めんとす
修めんとすを修めんとす

絶つて其業の心よく
身も心も救はれ世に
救はれ世に救はれ世に
救はれ世に救はれ世に
救はれ世に救はれ世に
救はれ世に救はれ世に
救はれ世に救はれ世に
救はれ世に救はれ世に
救はれ世に救はれ世に
救はれ世に救はれ世に



と年々の中を
くまひに
結ばたけき
細るり
やうり
あまの
あまの
あまの



まごあま
つら
あま
あま
あま
あま
あま

那 意 情 じ 毎 年 色 理 在 ち

昔 報 ち 寄 ち ち 百 年 百 年 ち ち

ま 一 夜 の 夜 赤 ち 方 有 ち 心 活 ち

お 下 新 夢 ち ち ち ち ち ち ち

我 勝 の 更 今 ち ち ち ち ち ち ち

ち ち ち ち 電 光 石 落 ち ち ち ち ち

後 母 不 入 ち ち ち ち ち ち ち

一 貫 今 ち ち ち ち ち ち ち

ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

別名
いりま
あしき
中よりと
アムアム
礼儀
早す
るん



うらやみ
あそび
その中
そゆく
あつそ
刀あく



一人の福の因ふ花の甚と不佛が
具の親を流は心と流は公を
精進を後ある腰を後ある
流は親を父母の因ありと
眼を以て鼻のかり諸の住夫を
罪の重きを記し
一女房は
女は優
女は物
流は波
たりは
世は

一女房は
女は優
女は物
流は波
たりは
世は



能われバ
 神の
 さうろく
 母の
 心
 人かいた
 ちんをさ
 けい
 くれはまの
 うに
 まり
 之



人かいた
 まの
 けい
 くれはまの
 うに
 まり
 之

縁はあつた計其源をたのむるに
 本とまじりて思ふ物毎に心優
 ち男は神くさく其源をたのむるに
 優るもの佛神と憐れなまの心
 後世のていこく
 一男一女居たりて能く入るに

彼物と其系は女をいふもの
 一生をたのむるに
 ち男は神くさく其源をたのむるに
 優るもの佛神と憐れなまの心
 後世のていこく
 一男一女居たりて能く入るに



あせのひ
人乃あせ
まき
よあ
ふび
よあ
よあ
よあ
よあ
よあ



あせのひ
人乃あせ
まき
よあ
ふび
よあ
よあ
よあ
よあ
よあ

一 兄弟姉妹ありて親の死に持たぬ者
も不仕のひ度まで安んじ合
毛と奉と云ふは親の持と奉と
と親と云ふ御持と申すは世の
音くきとあるんとも昔と音くき
無と云ふは世の親をば世の
持と云ふは世の親をば世の

一 孝子といふ親の方より義理の
持と云ふ人の世と云ふは世の
親の死に持たぬ者
も不仕のひ度まで安んじ合
毛と奉と云ふは親の持と奉と
と親と云ふ御持と申すは世の
音くきとあるんとも昔と音くき
無と云ふは世の親をば世の
持と云ふは世の親をば世の



目は鼻
かたわら
あつたま
かたわら
あつたま
あつたま
あつたま
あつたま



人の
あつたま
あつたま
あつたま
あつたま
あつたま
あつたま
あつたま

古くもよき親を頼りてこそ世の福
ありとありの世はともなはれぬ
善人といふ大業は世にあらざらん
一女子もよき世にありてこそ
世の福ありとありの世はともなはれぬ
善人といふ大業は世にあらざらん
一女子もよき世にありてこそ
世の福ありとありの世はともなはれぬ
善人といふ大業は世にあらざらん
一女子もよき世にありてこそ

是ら後世の事ゆきよき女
かたわらあつたまあつたま
善人といふ大業は世にあらざらん
一女子もよき世にありてこそ
世の福ありとありの世はともなはれぬ
善人といふ大業は世にあらざらん
一女子もよき世にありてこそ
世の福ありとありの世はともなはれぬ
善人といふ大業は世にあらざらん
一女子もよき世にありてこそ



我ら
みさき
世の
か
人
さ
お
お
お



タムレ
さ
お
お
お
お
お

冬に比喩ありて慈悲を説く者
わが民を育めんと名をたつあり

一長童あり比喩の世に打擲く

とあるべし我身と切を説く

見よ痛がばらるるも公心

一子ありその速物と事記ありて

ありた奴を佛にまじりて

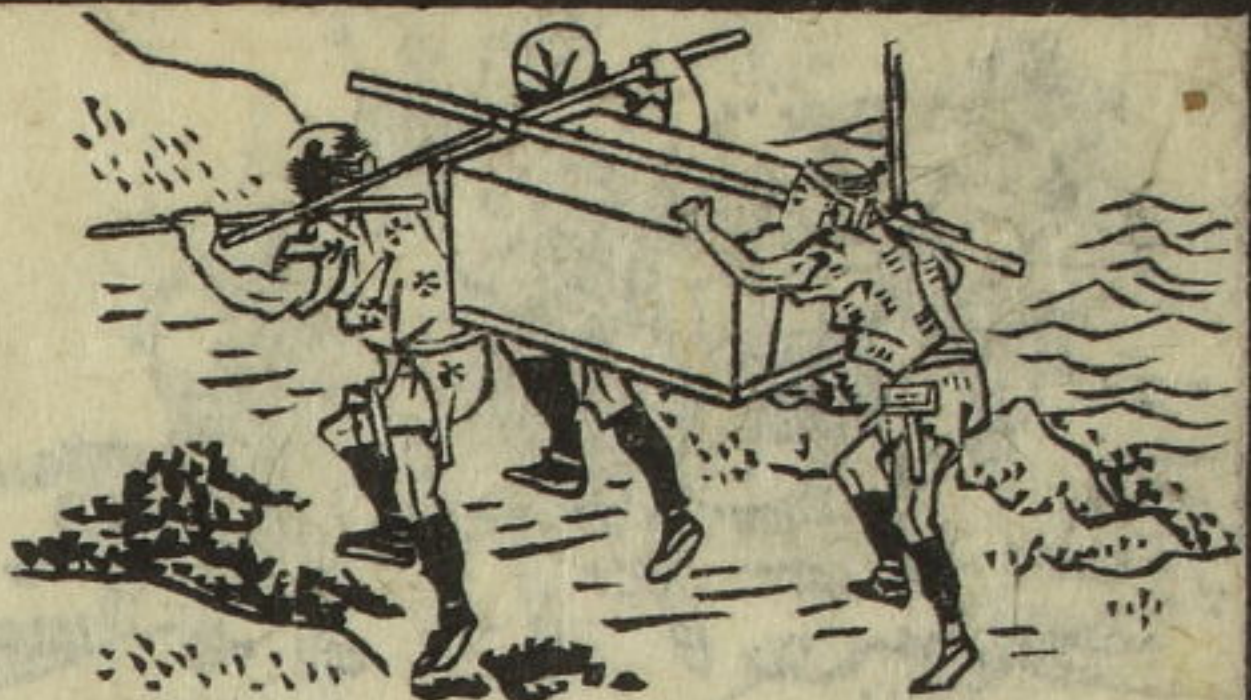
六とて又出家を施さばらん

わがらむお精進後の世に

百羅業の法ありて身と生れ

お公後の世にわが事あり

一旅立ち馬人果てふまはるる



うた
あつて
人の便
か
肉
あつて



うた
あつて
人の便
か
肉
あつて

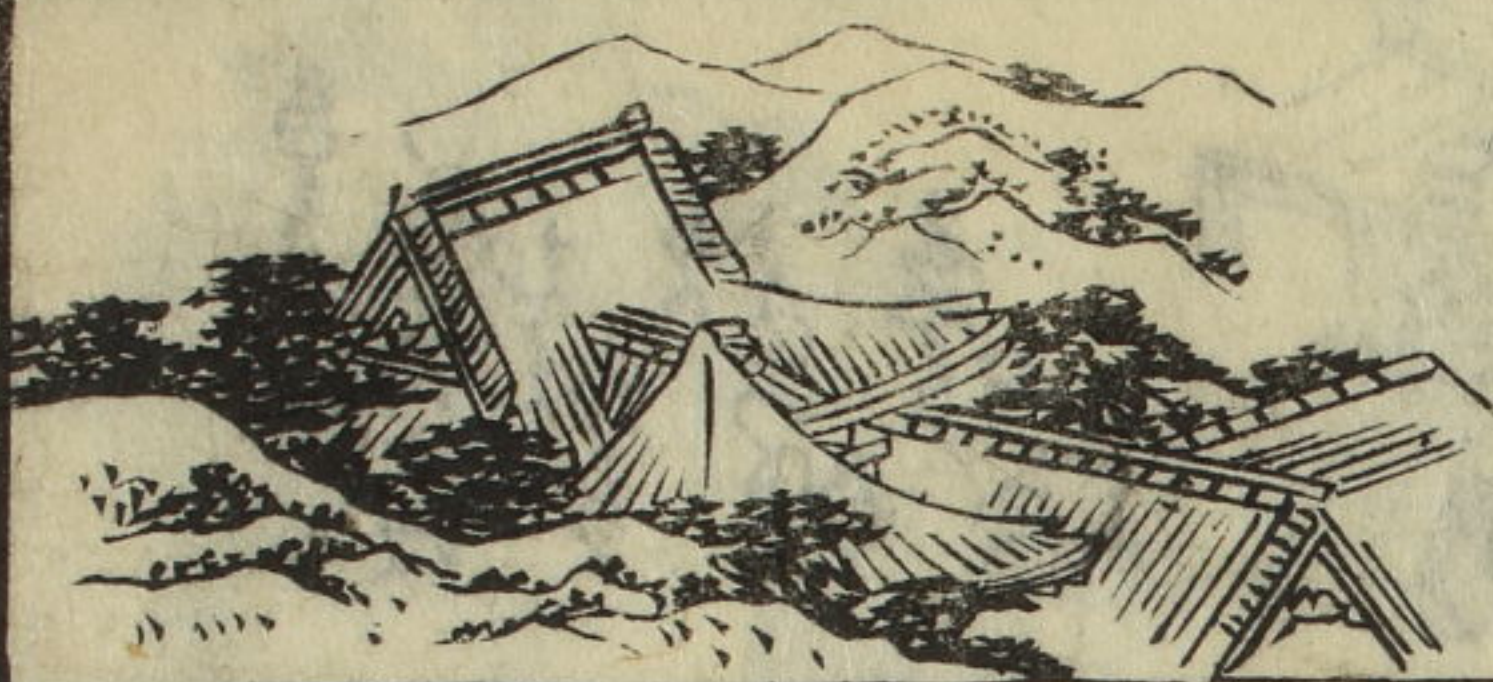
持ておぼしき屋敷の多人数を普くあや
 肉と若衆と辛持とらう計りか
 ぬきぼうとあやむぐり持て返り
 うまき若衆持てかきとらうあや
 手前の事とくどのそり芳は海一
 一人の芳とあやむぐり持て返り紙をど

個々総て人人形をどくあはれを
 知り人をどくあやむぐり持て返り紙をど
 原をどくあやむぐり持て返り紙をど
 持て返り紙をどくあやむぐり持て返り紙をど
 せめていりあやむぐり持て返り紙をど
 宗は並あやむぐり持て返り紙をど



年あり
人あり
人あり
人あり
人あり
人あり
人あり
人あり
人あり
人あり

人の世は如くまゝの世なりて
世の世は如くまゝの世なりて
世の世は如くまゝの世なりて
世の世は如くまゝの世なりて
世の世は如くまゝの世なりて
世の世は如くまゝの世なりて
世の世は如くまゝの世なりて
世の世は如くまゝの世なりて
世の世は如くまゝの世なりて
世の世は如くまゝの世なりて



年あり
人あり
人あり
人あり
人あり
人あり
人あり
人あり
人あり
人あり

人の世は如くまゝの世なりて
世の世は如くまゝの世なりて
世の世は如くまゝの世なりて
世の世は如くまゝの世なりて
世の世は如くまゝの世なりて
世の世は如くまゝの世なりて
世の世は如くまゝの世なりて
世の世は如くまゝの世なりて
世の世は如くまゝの世なりて
世の世は如くまゝの世なりて

さいしゆ
 人かたは
 ちやう
 よのこ
 ちやう
 せう
 せい



階
 中
 の
 定
 わ
 し



一兄弟解多ありて親の仏を殺する事

心づかぬにせぬ弟をせぬ入るる事

美其らり親の佛を殺す事

地獄に墮して浮かす事

光を奪ひ去る事

又ありて大根を煮たりて殺す

走らざる事

ぬき足ひかきけり

事の唯物殺勝を佛殺す事

一人回る事

筆筆にのびたし

我々の昔の事

三考言

三考言



大なり
おもしろ
まわりの
ついで
おもしろ
おもしろ
おもしろ
おもしろ
おもしろ
おもしろ



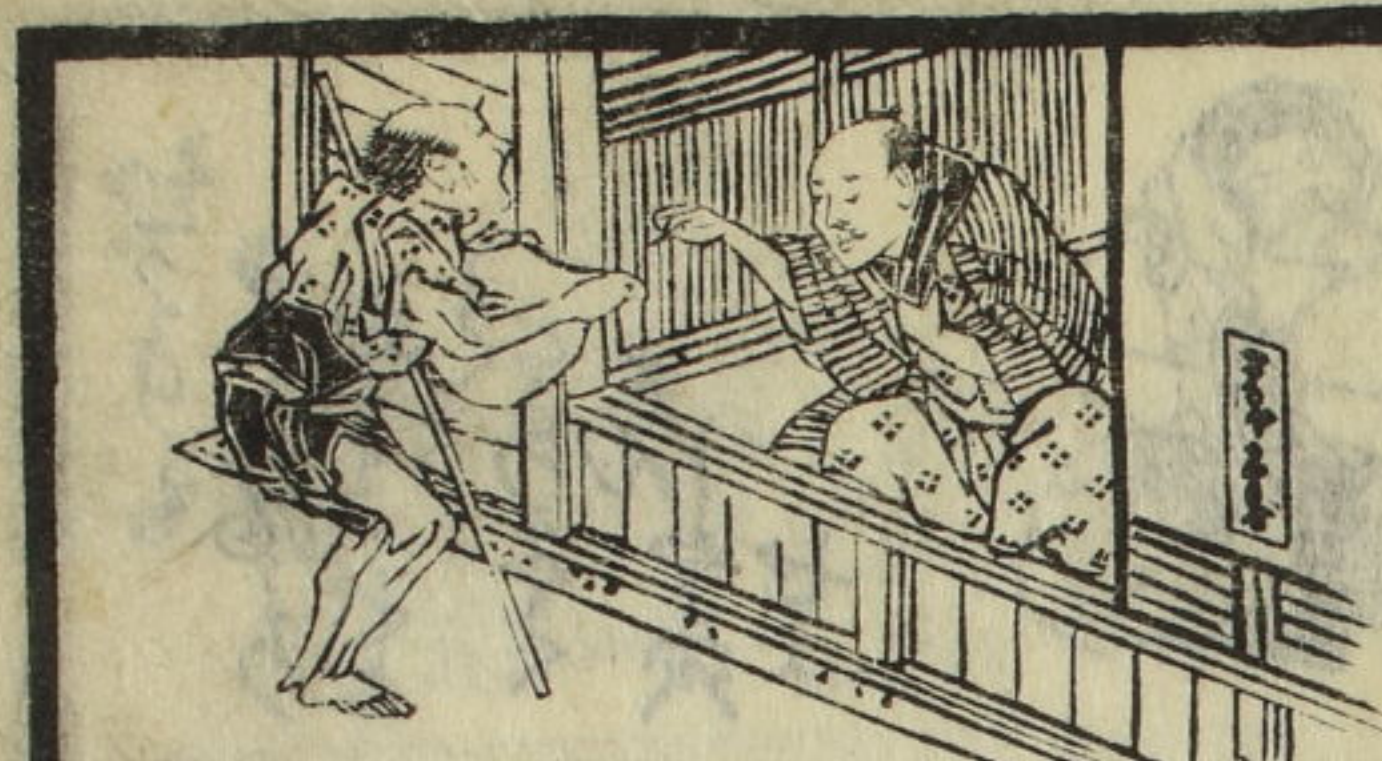
金銀は
おもしろ
おもしろ
おもしろ
おもしろ
おもしろ
おもしろ
おもしろ
おもしろ
おもしろ

一 悔く然くせぬ人の俄よ志念はた
別の本よかぬと結るるはさな
何事かおぼるる且れぬと
物事かやれぬ事と前よはる
一人のおぼれかやれぬ事と
物事かやれぬ事と前よはる

一 悔く然くせぬ人の俄よ志念はた
別の本よかぬと結るるはさな
何事かおぼるる且れぬと
物事かやれぬ事と前よはる
一人のおぼれかやれぬ事と
物事かやれぬ事と前よはる



しなまは
わたりすたる
くはらうは
うまうま
あまのま
あまのま
あまのま
あまのま
あまのま



聖法師
聴く方
耐えん
あまのま
あまのま
あまのま

あまのまはうとたかほつ後とて

一傾城白拍子おらん片髪とて乃の若

なきべとてあまのまの雁の羽とてあまのま

あまのまのまはあまのまのまのまのま

一雁更初とてあまのまのまのまのま

いとせゆとてあまのまのまのまのま

あまのまのまのまのまのまのま

あまのまのまのまのまのまのま

一人の海濱とてあまのまのまのま

えぬとてあまのまのまのまのま

あまのまのまのまのまのまのま

一物もあまのまのまのまのまのま

びんごのり
 むんご酒ち
 むんごど
 ぶんごそく
 むんご
 せい



われが
 ぶひも
 むんご
 むんご
 むんご



多分
 多分
 多分
 多分
 多分

一人
 一人
 一人
 一人
 一人

先
 先
 先
 先
 先

一
 一
 一
 一
 一

一
 一
 一
 一
 一

一
 一
 一
 一
 一

一
 一
 一
 一
 一

一
 一
 一
 一
 一

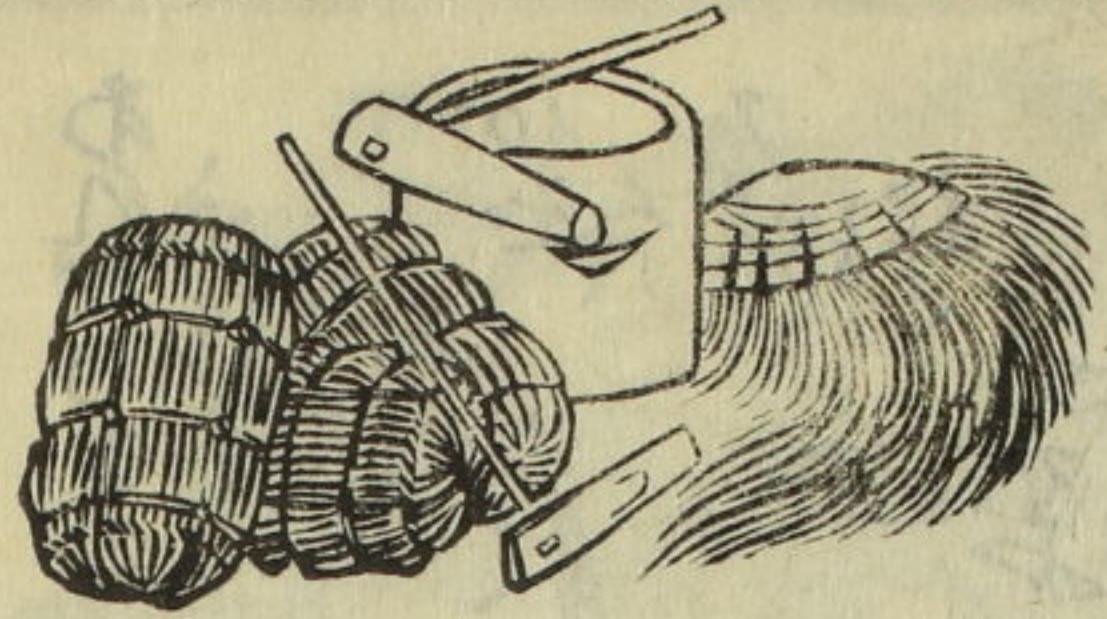
一
 一
 一
 一
 一

一
 一
 一
 一
 一

一
 一
 一
 一
 一

一
 一
 一
 一
 一

一
 一
 一
 一
 一



惟もみや
 ぞらきく
 かくくの
 月ツキの
 さまや
 人乃
 きの甲

人の
 こころ
 まは
 ひと
 こころ



一 百日の家内ある御ものをとて
 竹のたてむしにむしあがなむ
 かばはた賢者ありと知はぬ者あり
 かりはたむしにむしあがなむ
 物と知はたむしにむしあがなむ
 一人の心はむしにむしあがなむ

月夜とむしにむしあがなむ
 めとむしにむしあがなむ
 好むとむしにむしあがなむ
 よかむしにむしあがなむ
 多めむしにむしあがなむ
 利生むしにむしあがなむ
 善者のあがなむ

女門

四十四

たのび
人の心を
うごかす
つらな
つらな
つらな



わが
おの
あま
あま
あま
あま
あま
あま
あま
あま
あま



一 神の人の心を鏡とせんとて思ひつゝ
もがれん心身をば
神國の中に
ここのちんこく
しりま

は神國の中に心を曲とらふとて縁
つらな
つらな
つらな

あはれおの心も人に捧るといふは
おのこころ
ひとのこころ
いさむ

扱ふは二百年中をばおもひぬ
あつち
あつち
あつち

一 神の心をば鏡とせんとて思ひつゝ
あつち
あつち
あつち

一 我身の時も心を鏡とせんとて思ひつゝ
あつち
あつち
あつち

こころをば法すとて思ひつゝ
あつち
あつち
あつち

一 我身の時も心を鏡とせんとて思ひつゝ
あつち
あつち
あつち

一 我身の時も心を鏡とせんとて思ひつゝ
あつち
あつち
あつち

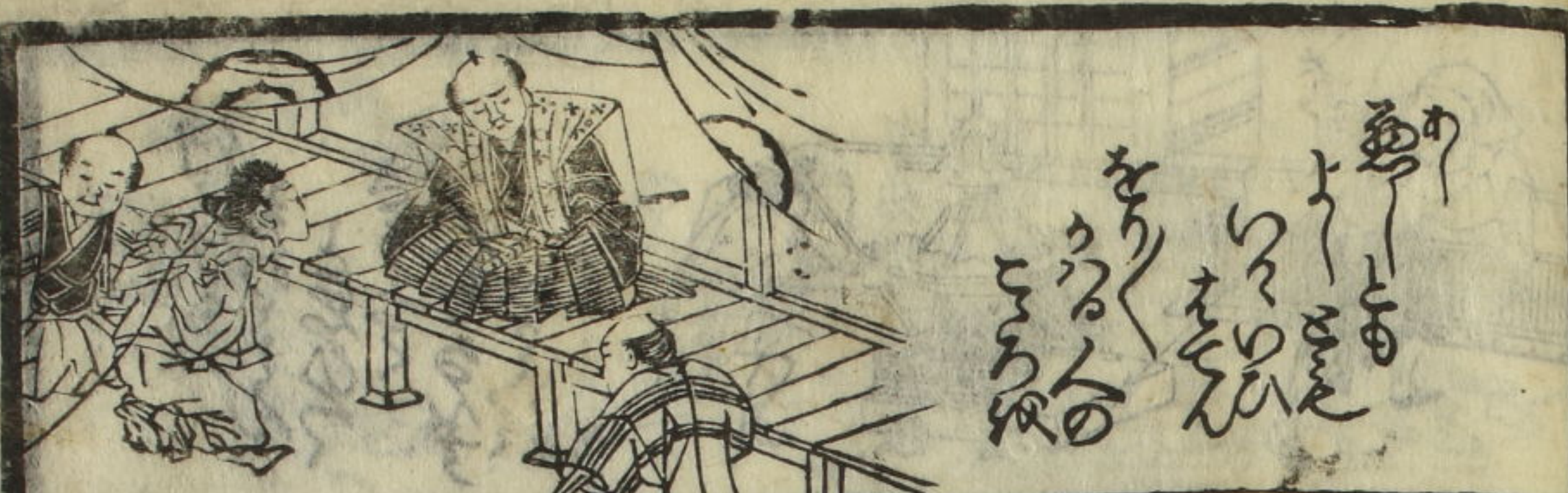
海を渡る多し神をて人集て思ひつゝ
あつち
あつち
あつち

あはれおの心も人に捧るといふは
あつち
あつち
あつち



人のうゑの
あゑん
ぎんた
をば
用わりの
つわた
のてん

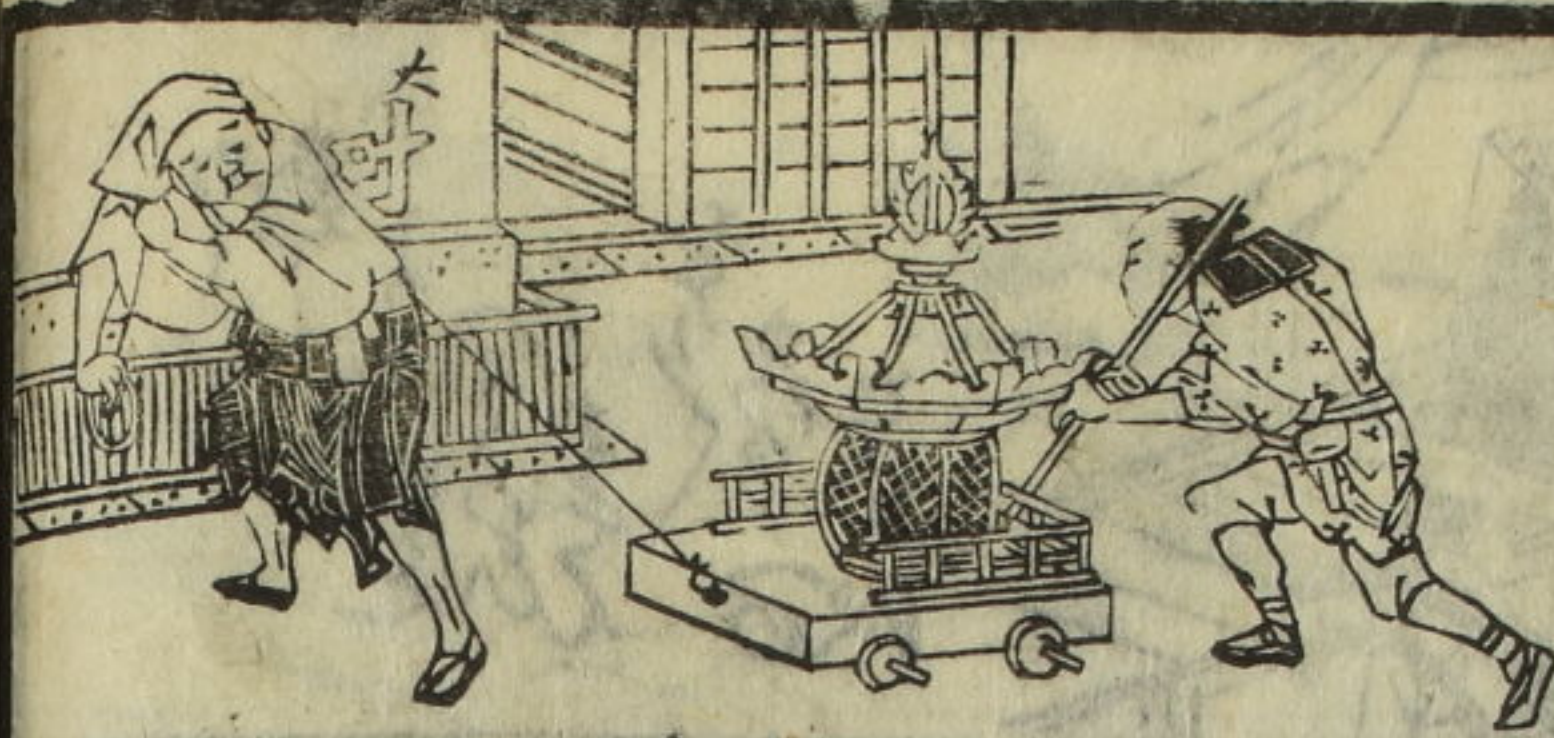
一夜道をゆくついでに以てまじりて
 けだてすついでに心なるまじりて
 一酒の度と逢ふまゝとてまじりて
 吾もよまらむをば人かぐるごと
 から那自然の母元天切ひり
 習者出く聲をばいづるまじりて



あ
よ
う
ま
え
つ
の
い
ん
ま
さ
り
く
う
る
の
う
ら
い
ん

其の以て我を人の世と事あるごと
 一人毎に金銀とてその其の世と事
 彼に徳とて地獄の法と事一紙
 生後とて名とて物とて名とて人
 乃其世と事世とて地獄の法と事
 一皆時の逢人と擗換をば佛の由と事

何のゆ
 用ひしん
 人をも
 人をも



門
 門
 門
 門



我々もつらむのちも海に渡りて
 ぬら英は多し人をも
 一卒もふ人をも海に渡りて
 海に渡りて
 多のちも海に渡りて
 事あり先づ人ともくたす

一馬もつらむのちも海に渡りて
 おは昔も人をも海に渡りて
 一卒もふ人をも海に渡りて
 一卒もふ人をも海に渡りて
 一卒もふ人をも海に渡りて

一

一

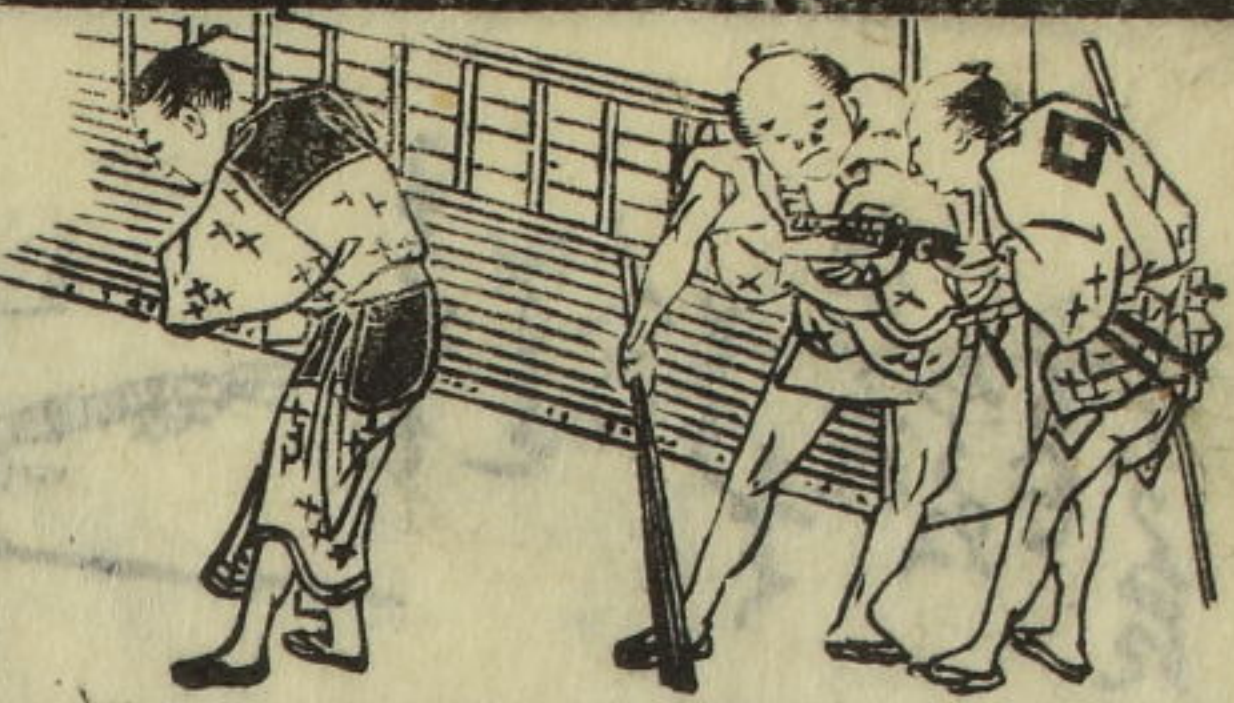
父母の
つとめ
を
こころ
よく
なす
べし
人
を
た
ぶ
ら
ぬ
べし



孝
の
こ
ころ
を
こ
ころ
よく
な
す
べ
し
人
を
た
ぶ
ら
ぬ
べ
し

物もよき物と知れば家も失は弱
とせば強と知れば能とせば能
らえんや古の事と人を知るを
歩虎の歩はゆるいしなるを
命と知らぬは命と知らぬは命
早急あはゆるやもの強はなり

一我も人の知もあはゆるや人の強も
さあはゆるや初も人の強もあはゆる
一太石の川流るや舟も業もあはゆる
先人を流して後流るや人の強も
あはゆるや事もあはゆるや勝もあはゆる
一徳も事もあはゆるや人を知るもあはゆる



無事
 無事
 無事
 佛
 者
 又
 の
 佛
 の
 佛
 の
 佛
 の
 佛



無事
 無事
 無事
 佛
 者
 又
 の
 佛
 の
 佛
 の
 佛
 の
 佛

今冬は行程を断つ事あり
 は秋と稱しこのうへもあぐささ

うもたむとあぐささ
 大なるまぬりありや

一人の位も僧の人の位も
 一人の位も僧の人の位も

一人の位も僧の人の位も
 一人の位も僧の人の位も

一人の位も僧の人の位も
 一人の位も僧の人の位も



ゆきば
ゆきのの夜
まうせふれ
あつら
うら
まうせ
は



あま
かた
のちは
かた
あま
あま
あま
あま
あま
あま

孝言

台してまきまき又耳のたは
くらくらと其原は久遠に
末をよりてあつらふる所
一船構らるる大海流るる
とまらるる真珠の珠の
たはと海にまきまきと海に

一人の中ふ交るる我の世の
まきまきとあつらふる
まきまきとあつらふる
まきまきとあつらふる
まきまきとあつらふる
まきまきとあつらふる
まきまきとあつらふる
まきまきとあつらふる

文門

四一



吾人ぞ
見よ
我身も
みぢま
鐘
まら
まら
まら

一 此の世は人の世なりて
 一 出家の人は心静かに
 一 根を断つて
 一 其の心を
 一 其の心を
 一 其の心を
 一 其の心を

文門

四十一



上
みぢま
みぢま
みぢま
みぢま
みぢま
みぢま
みぢま

一 此の世は人の世なりて
 一 出家の人は心静かに
 一 根を断つて
 一 其の心を
 一 其の心を
 一 其の心を
 一 其の心を

吾人の
むらびさま
まこと
おき
おき
おき
おき
おき
おき



六つあし人富貴きるとて貴かじ智恵の
おん人あまのさきとてさきとてさきと

最明寺時頼

時年二年歳

弘長二のしん
さのえ成のき月と歳

道崇
五

履の留

木内清太文
木内法印

